

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 小澤 京子

小澤京子氏の博士号（学術）学位請求論文『ユートピア都市の書法——クロード＝ニコラ・ルドゥの建築思想』は、18世紀フランスの建築家クロード＝ニコラ・ルドゥの作品と著作、とりわけ主著である『芸術、慣習、法制との関係の下に考察された建築』（以下、『建築論』と略す）の多角的な分析を通じて、ルドゥの建築思想を同時代のさまざまな思潮との通底性のうちに総合的にとらえた論文である。

序論において先行研究とルドゥの生涯が概観されたのち、第1部「建築は詩のごとく」では、ルドゥが「建築のアルファベット」と呼んだ、とりわけ球体や円形（ないし半円形）を代表とする基礎的構成単位と、それらを組み合わせる、いわば建築言語の「綴字法」が主題とされる。単純な幾何学的基礎形態の明確さから、一義的な意味を伝達する合理的構成と見なされることが常であるルドゥの建築構想が、実はバロックや古典古代の要素を含んで異種混濁的であるとともに、ひとつひとつの文字にあたるその構成単位もまた、ヒエログリフないしエンブレム的な謎めいた意味作用を行なう記号として機能していることを、小澤氏はジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージなどとの比較を通じて明らかにしている。

第2部「顔貌と怪物（モンスター）」で扱われるのは、ルドゥにおける建築物の「性格（キャラクター）」をめぐる問題である。小澤氏は、18世紀に「キャラクター」の概念が有していた意味の広がりや踏まえ、「建築のキャラクター」の表出に関わるルドゥらの議論と同時代の観相学のパラダイムとの対応関係を示したのち、ルドゥにおいては、しかし、新古典主義建築の「キャラクター」理論や観相学を支えていた「適合性（コンヴナンス）」の観念が失効した結果、「怪物／畸形（モンスター）」的な混濁物が作品として生み出されていると指摘する。ルドゥの建築は、表層から本質を読み取る技術とそのような技術の限界ないし例外をなす異物の存在という、同時代の分類学的な知の様態と密接に関連していたのである。

『建築論』におけるルドゥの建築・都市構想のうちに、性・教育・労働に関わる身体管理の主題を発見しているのが、続く第3部「性的建築と身体管理の契機——醇化・教育・監視」である。『建築論』における「ショーの理想都市」の計画案には、男根型の平面図で示された、「オイケマ」と称する青少年のための放蕩の館の構想が含まれている。小澤氏はこの館の計画を、同時代の結婚および売春をめぐる言説やマルキ・ド・サドが描き出した建築のヴィジョンと比較することによって多層的に解釈し、その成果をひとつの核として、「ショーの理想都市」に認められる身体管理の思想をフランス革命前後の思想史的布置のなかに位置づけている。

第4部「書物の中の／書物としての理想都市」で小澤氏は、一冊の書物としての『建

『建築論』におけるテキストとイメージとの関係や「語り（ナラティブ）」の形式に焦点を絞り、それらの相互作用によって生み出されている独特な空間表象を分析している。いわば建築のファサードに見立てられる「扉絵」の機能に始まり、通過儀礼のプロセスをたどるかのような「旅行記」としての「語り」、そして、図版がその「語り」に対して及ぼす効果といった『建築論』の分析を通して、ルドゥにとってのユートピアである理想都市の空間が、書物という表現形態を駆使して構築されていることを、小澤氏は緻密な読解によってここで実証している。

以上のように小澤氏は、ルドゥの建築構想のうちに、文字から書物にいたる言語的な構築物の性質を看取している。そうした観点から、小澤氏はルドゥの作品と著作を、文字・綴字法・語り・書物といった各レベルでテーマティックに分析し、全体としてルドゥの建築思想総体の「書法」を明らかにしていると言ってよい。そのうえで第5部「世界創造主としての建築家」は、ルドゥ自身の自己表象を論じることにより、建築および都市の「書法」における、新たな言語創造者としての彼の「著者性」をめぐる議論を展開している。そこでは「デミウルゴスとしての建築家」の自己イメージが、理想都市の計画案に組み込まれた監視の視線が孕む権力性や、ルドゥの著作で執拗に浮上する、「万能の眼」＝「太陽」という象徴的なモチーフと緊密に結びついていたことが見出されている。

本論文は、従来、「モダニズムの先駆者」あるいは「幻視の建築家」として、彼が生きた時代からは乖離ないし逸脱した存在と見なされる傾向にあったルドゥを、18世紀フランスの新古典主義の建築思想はもとより、観相学をはじめとする知の体系や、サドをひとつの極点とする性的身体をめぐる言説およびそれに関わる制度など、同時代の広範な動向との関連のうちにとらえ、それによってこの建築家にして文筆家の正確な歴史的な位置づけに大きく貢献している。ここで「ユートピア都市の書法」と呼ばれているルドゥによる新しい建築言語創造の試みが、建築史の枠組みを超える射程をもつものであったことを、小澤氏は本論文で説得的に示しており、それはさらに、ルドゥ研究を通じて18世紀文化史に新たな研究領域を開拓するものと言えよう。

審査委員からは、ルドゥと同時代の思潮との通底性をめぐる議論において、その深層にある18世紀思想の構造にまで達するような理論的考察が不十分ではないかといった点のほか、17世紀以降のフランスにおける絵画論・芸術論のより詳細な検討、ルドゥが設計した製塩所の事業主である企業家との関係をはじめとする経済・政治的な側面の調査、ルドゥの建築思想における自然観の考察などの必要性について、批判的指摘があった。ルドゥの難解なフランス語の解釈に関しても、いくつか疑義が呈された。しかしながら、これらは本論文の射程の深さに触発されたものであり、その学術的価値を損なう決定的な瑕疵とは言えないという点で、審査委員全員の意見が一致した。

以上を鑑み、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。